

にしき
錦のほなし

あやにしきといえは美しいものを形容するのに用いられています。なかならず錦は金に等しく、染織品中も最も高級なものとしておられます。錦の「に」は丹、「し」は白、「き」は黄で、いくつもの色糸をもって模様を織り出しているもので、一色の色糸を用い、織り方の相違で模様を浮き立たせ、装飾効果をあらわす綾とは異なります。

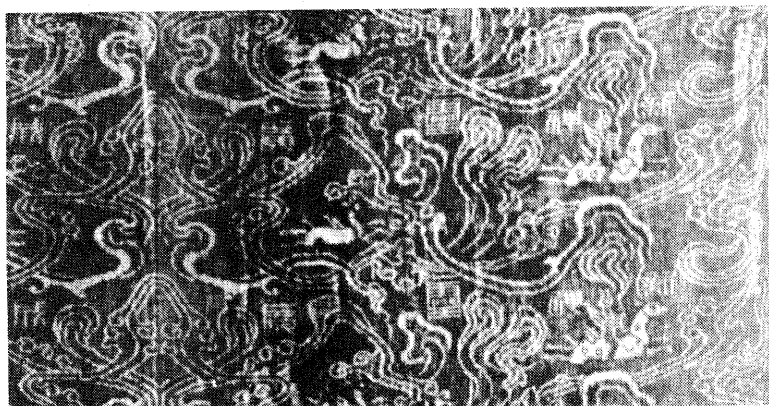
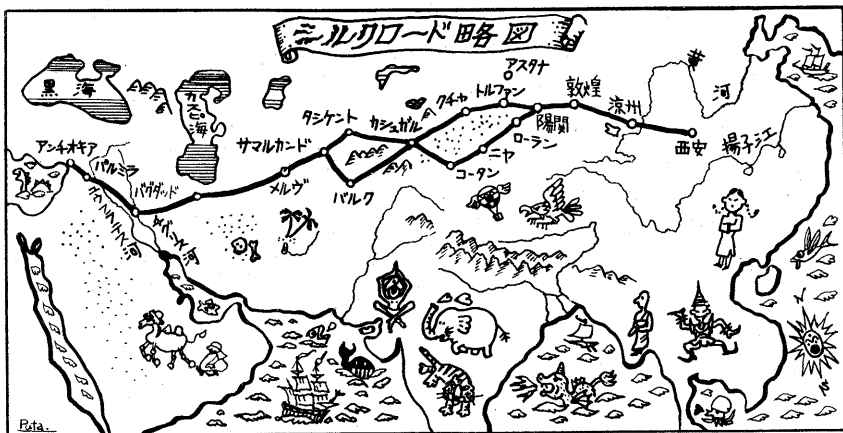
最近、上野の東京国立博物館で正倉院宝蔵の染織品の模造展が開かれましたが、ご覧になったでしょうか。わが上代の古裂は久しい間、他の工芸品ほど重要視されない時期がありました。その質のすぐれていることと共に量的におおびただしく、世界的な文化財として重要な地位を占めておるといわねばなりません。この正倉院蔵、あるいは法

横張和子



隆寺以来の上代の古裂は、文字通り断片化してしまっています。その年代は七世紀から八世紀にわたり、中国では初唐から盛唐にまたがる時代であります。

正倉院蔵の古裂の模様をみると、ペルシア風の、またペルシア模様源流をもつような文様の多数を見いだしますが、さらにビザンチン様式も見受けられ、これらが盛んな東西文化交流の所産であることがわかるのであります。ところでこれら錦綾は絹糸で織られ、今にその光沢の美しさをとどめておりますが、生糸をとる桑蚕の術は中国が創始であろうとされています。その源は古く殷の時代（前一二〇〇）に絹で織られた布があったといわれております。中国の絹は布に織られ、遠く西方世界（ローマン・シリア）



漢字がおりこまれた経錦

に運ばれました。その交易の道がシルク・ロードでありま
す。事実、この絹の道に沿う
古代都市遺跡において発見さ
れております。イギリスの偉
大な中央アジア探検家である
A・スタイン卿により中国新
疆省タリム盆地にひろがるロ
プ砂漠の楼蘭の古址から、ま
たさらに西漸して、地中海東
岸とユウフラテス河の中間に
位置し、隊商都市として繁栄
したパルミラ遺跡の墳墓から、
漢字を織り込んだ明らかに中
国の錦とされるものが発見さ
れております。楼蘭は四世紀
ごろ、パルミラは三世紀のお
わりにそれぞれ滅び、そのま
ま砂漠に没してしまいました
ので、これからの出土遺物の

年代の下限は三―四世紀とすることが出来ます。

しかし、これら出土発見の錦は、わが正倉院蔵の天平裂などとは外観を甚だ異にするものであることが注目されます。天平裂に見るような大柄で、多色華麗な模様とは異なり、色調は幽暗で、図様は雲気文という、山岳のように連続し、ところどころうず巻状の節のある怪異な文様帯が波状をなす間に、幻想的な獣や鳥を配しているものです。さらにこの模様には神仙的な意味の漢字を織り出しているものがあるのですが、このような織銘に関し、東西の学者により解説が試みられ、ある錦の年代観は、それが紀元一世紀のはじめの製作であろうと結論され、このような錦が中国漢代において製織され、異域に運ばれていったことが実証されたのであります。またこれら漢代の錦の織り方を調べますと経糸で文様を顕わしているものであります。これを學者は経錦（きんきん）などといっておりますが、これに対して天平裂の多くの錦のように緯糸で顕文（きんぶん）されているものを緯錦（きんきん）と呼んでおります。この経錦、緯錦の用語はその時代に区別して用いられてはおりませんが、その相異に関しては織物史上画期的なことといわねばなりませんし、なお東西文化交流の観点からも興味ある事実を含んでおります。

経錦は中国で創始され、紀元前後にはその技術は完成の域に達し、巧絶精妙な錦が織られ、北辺の異域の民族の慰撫のために、また西方に向けては交易のために多量に送られて行きましたが、これを手にした匈奴や西方のギリシア・ローマ人は、これを珍貴な宝のようにとうとびました。ことにその絹という材質はよろこばれ、珍重され、ローマの博識家プリニウス（紀元二三―七九）のしるすところでは東方遠来の絹織物はほどかれ、節約して再びそれを用い、布に織りなしたとあります。この記事に関し、織物をほどくその作業の間にその布の織り方の秘密をもさぐったであろうといわれております。

そもそも西方世界では、六世紀ごろまでは蚕を飼い生糸をとる術を知らず、織物の用糸にも羊毛糸を用いていた人は、布に模様を織り込むために古くからつづれ織の技法をとっていました。その場景はギリシアの壺絵などに見ることが出来ますが、簡単にいえば、二本の柱を間隔おいて立て、その間に横木をわたし、その横木いっぱい（きんきん）に経糸をならべ、その糸の末端に重石をつけて糸を緊張させ、その間をぬって、色緯糸（きんきん）を用い、賦彩に必要なだけ色糸を打ち込んで折り返し、文様を作って行くものですが、この技

法では布面いっばいに模様を反覆、繰返して織り出すことは出来ません。

これに対して、中国からもたらされた錦では、布一面に模様織り出され、しかも量産も可とされるものであります。すなわちこれを織る機は空引機（そらひきばた・花機とも書く）というもので、この機の装置によれば、模様を機械的に反覆して織り出すことが出来、さらに左右相称に、上下打ち返しに模様を織り出すことが出来るのであります。この機もまた中国で創案され、四世紀以前に西方に伝えられたのであらうと考えられています。この機を用い、他方中国の錦の組織の秘密を知った西方人がその模織を試みたであらうことは容易な推定ですが、シリア工人の作であらうとされる羊毛製の経錦の遺例があります。経錦は経糸に色糸を用いるもので、普通三色を一組とし、これを一本の糸に見立てて、これをもって地と模様を顕文して行くのであります。必要な色糸のみを表に出し、他は裏に沈めるこの操作を経糸において行なうことは、決して容易なものではなく、非常な習熟と辛抱強さを要する仕事であつたと考えられます。

これを羊毛糸で織る時には、それが短繊維であるために

錯綜してきわめて困難になつたと考えられますが、こうした困難な経験を通して、西方人はそれまで習熟していたつづれ織の技法にかわつて、この中国の空引機を用い、経糸と緯糸の関係を九十度転回して、緯糸に色糸を用い、模様を織り出すことを案出したのではないかとされております。このようなやり方ですと経糸の数は経錦の場合の何分の一に減らすことが出来、文揚げの通糸の数も減少させることが出来、その結果、大柄の模様を作ることが可能となり、さらに色糸の数も機の装置に拘束されることが少なく、多色の使用が可能となり、ここに章彩綺麗な緯錦が織られるようになったといわれております。

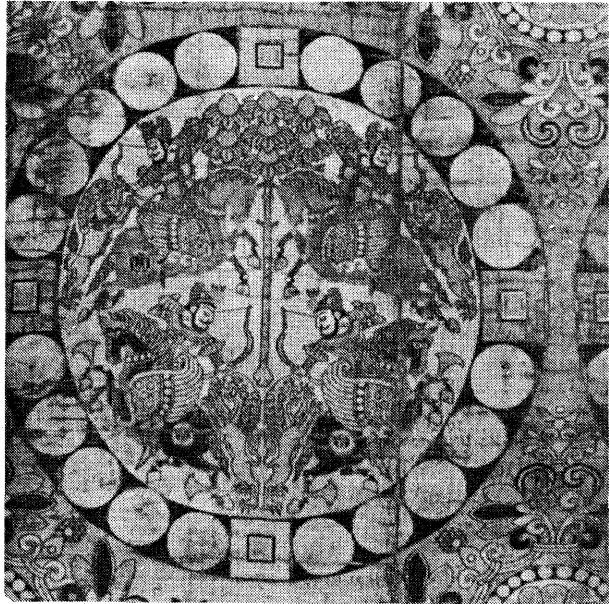
つまり、緯錦は西方人の発明であるというのが現在、大勢の説となっております。かつて、中国から西方に漢の経錦が運ばれて行きましたが、六世紀の末ごろから、絹の道を逆転して、東方にこの緯錦が送られてくるようになったと考えられております。シリア人が創案したであらうと考えられている緯錦の技法はササン朝のペルシアに入り、そこでその意匠と技法とはより洗練され、唐代中国のみか、東ローマ帝国にも流入し、それは西欧中世美術にも深く影響を及ぼすこととなります。

中国では古く伝統的な経錦の法はなお行なわれ、法隆寺に伝来する蜀江錦なる赤地の美しい錦を生み出しますが、八世紀に入るとこの技法は絶えて行なわれなくなり、これに代わって緯錦が主役となります。中国人が自国に伝えうけつがれてきた錦の技法を捨て、緯錦に転換して行くことになるのは、もちろんその技術が機能的にすぐれ、その上経済的にも審美的にも優秀性をもっていたからであると考えられますが、中華思想に自負する中国人が、異邦の文化をどのように受容したかを、この錦の技術の転換において見いだすことは興味のあることであります。それを示す、ちょうど、転換期に当たる錦の遺品の数々を中国新疆省のトルファン地区のアスタナの古墳墓から得ていることは学術的に高く評価されるところなのですが、この地域の発掘調査には前記のイギリスのA・スタイン卿が当たっておりますが、日本の東本願寺の大谷ミッシンもほぼ同じころ、それを行ない、また戦後の中国が実施し、新しい報告が出されております。その一々をお話する余裕をもっておりませんが、この地にササン朝ペルシアの錦がもたらされていたことはほぼ確実で、それが中国にまで達していたことは史書に明らかで、これら西方伝来の緯錦にならってペルシ

ア様式の錦が中国で織られて行ったことが考えられます。ここで注目すべきは、奈良、法隆寺に蔵される四天王文錦と称される国宝の錦であります。というのは、これに様式を同じくする錦がアスタナ古墳で発見されているからであります。すなわち、大ぶりの真珠のような白い円文を五つずつ連ね、四方に重角文を配した藍地の大きな円環文、円環文の中央に立てられた一本の果樹文、それを中心に左右に凶像を配している構図は、大きな円環文の並ぶ間に配されたパルメット唐草の菱形の華文と共に独自のスタイルをもっておりますが、法隆寺錦では四騎の騎馬人物が相称に、上下に向きを違えて配されておりますが、その人物の容貌は髪濃く明らかに胡人の顔つきであります。彼らは弓をひき、背後から襲いかかる獅子に向かつて、いまや、矢を放たんとしている場景をあらわしておりますが、このような凶柄は、東京の出光美術館に所蔵されている、ササン朝ペルシアの帝王狩猟図銀製の凶様に酷似していることに気がつかれます。星辰を象徴する連珠文の円環文、一本の立樹、そしてその左右に鳥獣人物などを配する凶柄はペルシア模様の典型であります。ことに一本の樹文は、生命の樹、あるいは聖樹と呼ばれ、それを中心に左右相称の構



ペルシアの皿



四天王文錦

図をもつものは織物模様のみならず、前三千年記にさかのぼる古いメソポタミアの芸術に根ざし、西アジアではイスラム時代に至るまで続けられているものなのであります。

このように単位文が截然と割り切れる幾何学性はペルシア芸術の特徴でありますが、漢代の錦が連錦と続けられはつきりせず、複雑な模様であるのに比較して、その相異が認められるのですが、それゆえ、これらの錦は東方のイランで製織したものとされてきましたが、馬の腹部の円文中に漢字を織っておりますから中国産であることを証するものであります。この顕著にペルシア的な中国産の錦は緯錦の法で織られております。すなわちこれらの錦の製織をもって中国で本格的に緯錦を織り出したはじめとしておりますが、それがいつごろ行なわれたかについてはなお論議のあるところとされております。七世紀のおわり、または八世紀のはじめというのが定説ですが、わたくしは七世紀の前半を考えております。

ところで、中国ではこのような左右相称に鳥獣を対置させている文様を瑞祥の模様とし、その文様を織り出した錦を瑞錦と称したことは中国画論にみえております。ペルシア錦の文様ではアスタナ出土の錦や、ヨーロッパの美術館

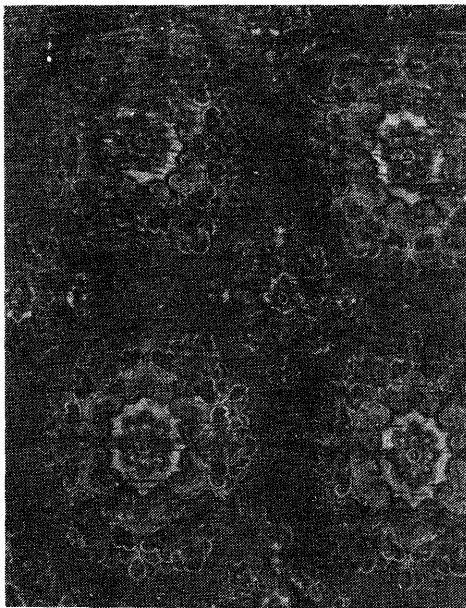
やキリスト教寺院に宝蔵されている錦の例からみて、靈化された動物（猪の頭、天馬、山羊、鳥、グリフォン）などが多いのですが、このような鳥獣文がそのまま中国に受け入れられたのではなく、道家的な瑞祥思想を透過して、中国文化に定着したと考えられます。上代裂にみる鳳凰や獅子の文様はこのようなペルシア文様に流れを発しているのであります。しかし中唐以後には、中国では佛教の興隆に伴って宝相華などの超現実的な大華文が織り出され、また杜甫や李白が生きた時代にはその詩風と同じく、写実性が反映し、自然主義的な絵模様の錦が織り出されてくるようです。正倉院蔵の天平裂にはこの時代のおおどかな、豪華

天馬の文様



な作風の錦が多数含まれております。有名な琵琶袋錦の妖麗なまでの美しさは経錦の技法では到底のぞむべくもないことで緯錦の法にして実現し得たもので、さらに組織の綾絡みの織技は一層これに光沢を与えて、にしきの精髓のきわみを示すものであります。

わたくしはこれら上代の古裂を、また中央アジアから出土した錦の断片を観察する機会を得ておりますが、なかには小さな断裂のみか、毛筋ほどになってしまっているものがあります。これらは多くは板ガラス二枚にはさまれたいわゆる玻璃装となっておりすが、ガラス越しにせよ、こ



天平裂

れらを凝視しておりますと、そのすぐれた文化財はさまざまなことを語りかけてくるようであります。その一つ一つを観察することは、子どもの観察研究と変わらないような気がいたします。

古代の工人が専念して作り上げたこれらの作品を、いかに断片化し断爛化しても、なお、敬愛をこめて保存して行こうとするのは、学術的な目的の他に、そこにほんものの魅力があるからであります。模様のある布は巷間にあふれ、珍しいものとはしなくなり、しかも多量なため、使い捨てなどがいわれておりますが、身近なものにおいても、永く愛着に耐えるものとは何かを、これらの古裂は深く教えるところのものだと思っております。小さな子どもさん方に、もう一度、ものを大切にするを語りかけることを考えられてもいいのではないのでしょうか。そしてこれには大切にされるものとはどんなものか、それを知る必要など、そのような教訓のようなものを古裂研究において考えられるのです。

(お茶の水女子大学)